



『緑の循環』認証会議

国内の森林が荒廃し、緑の循環が途絶えようとしている今――。

森林認証が日本の森を救う。

“家を建てることは、森を建てること。それが、昔から変わらない考え。”

いしで かずひろ

石出 和博

●建築家 一級建築士事務所アトリエ・エム代表取締役社長
HOPグループ代表取締役CEO

1946年、北海道芦別生まれ。73年、(株)藤田工務店入社(現代表)。89年に一級建築士事務所アトリエ・エム(株)を設立。以来、気鋭の建築家集団を率いて全国で作品を発表。96年、新しい住宅供給システムHOPを設立し、育て上げた。現在、HOPグループ代表取締役CEO。北の建築家奨励賞、林野庁長官賞、経済産業大臣賞など受賞多数。著書に建築技術集「ハウズドクター診察室」、建築作品集「石出和博とアトリエ・エムの世界」(ART BOX)などがある。NPO法人 森をたてようネットワーク理事長。



HOP東日本支社(横浜)にて

日本の気候風土にあった
最良の家には、産地が
明確な国産材が不可欠。

なかお よしいち

中尾 由一

●一般社団法人国産認証材利用促進協議会会長
●SGEC『緑の循環』認証会議専門部会委員

1932年、徳島県生まれ。高校卒業後に山陽パルプ(現・日本製紙)入社。仕事で日本各地の山林を歩き回り、数多くの林業家、製材業者と出会い、親交を深める。1970年代、国産ヒノキによる本格木造住宅を低価格で供給する手法を考案。それを着地建設で販売して好評を得る。その後、同社の顧問となり、1998年に社長に就任。2005年には、建築会社として国内初のSGEC森林認証を取得した。2006年に『緑の循環』認証会議専門部会委員、2007年には国産認証材利用促進協議会会長に就任し、現在に至る。



どうすれば日本の森は再生するのか

持続可能な経営を行なっている森林を、国や林業関連団体などで構成された第三者機関が評価、認証するSGECの「森林認証制度」。制度のスタート時から深く関わり、認証制度の関連協力団体「国産認証材利用促進協議会」会長の中尾由一氏と、同協議会の会員でありSGEC森林認証を3部門で取得しているHOPグループ代表の石出和博氏。ともに日本の森の行く末を憂い、真剣に森の再生を考える2人が熱く語り合いました。

*SGEC(Sustainable Green Ecosystem Council)

森林認証制度の役割とは？

中尾 私はいふん昔から、森や林業に関わってき

ました。その長い経験から日本に建てる家は、国産材を使った在来工法で建てた家が、いかに良い家だという信念を持っています。高温多湿な日本の気候風土にもあっていますからね。また、これまで国産材と多く接してきて、森林認証制度との関わりも深いことから、制度のことも多くの方に知ってもらった上で、認証材を使った住宅の普及を図りたいと考えています。ところで石出社長のHOPグループさんには、設計から施工、流通まで各部門それぞれで森林認証を取得していただきました。

石出 森林認証材で家を建てることは、適切な森林

管理を行なっている林業者を間接的に支援することになります。それが結果的に、環境保護や森林保全にもつながる。その点が素晴らしい。私も少しでもそのお手伝いをしたいと思いい、HOPグループの流通、施工、設計部門の3社が認証事業体となりました。今後は、北海道内は道産の認証材を使って、それ以外の地域は地元産材を使って家づくりをすすめていくつもりです。

中尾 日本に森林認証制度が生まれてから5年ほどですが、最近ではテレビや新聞などでも「森林認証制度」や「森林認証材」という言葉をよく見聞

きするようになりました。また、積極的に認証材を使って家を建てる人が増え、きたのも喜ばしいことです。

石出 認証材にはSGECの認証マークが付いている。一般の木材と混ざらないようになっています。生産履歴もはっきりしている。消費者にはそれが信頼の目安になります。ところで、森林認証制度はヨーロッパやアメリカ、カナダなど世界にありま

すが、日本に森林認証の動きが広まった背景には、どんなことが挙げられますか。

中尾 一存のように日本は昭和40年代に高度成長期を迎えて、それを契機に住宅産業が飛躍的に伸びました。生産性が優先されるようになると住宅が工業化され、安く大量につくれるプレハブ工法などが生まれました。その結果、安い外国産材が多く出回るようになったために、植林や間伐に手間のかかる森の手入れを怠るようになっていった。だから、日本の建築や林業がおかしくなっていたのだと思います。

石出 ここ数十年間で国内の林業や、林業に携わるたかさんの産業が厳しい状況に立たされてきた。だからこそ、森林を健全な状態に守っていく必要がある。それに森林が持続的に管理・育成されなければ、緑の循環が途絶え、環境破壊にもつながります。それを防ぐためにも、認証制度のよう



SGEC認証材第一号の富士宮市北山

な市場メカニズムが不可欠なのですね。

中尾 日本は人工林が多く、管理された適切な間伐をしなければ健全な森を維持できません。しかし、大変な手間と費用がかかります。それで手入が行き届かず、荒廃した放置林が全国にはたくさんあるんです。

石出 日本には豊かな緑がまだまだ残されているので、生産活動を止めないために、森林認証制度をさらに普及させていきたいですね。ところでいま、森林認証の面積はどのくらいまで広がっているのですか。

網走支庁管内の認証材が、
国内最大の認定地域に

中尾 国内第一号の森林認証を取得したのは、制度がスタートした2003年の12月。富士山麓にある日本製紙の北山社有林でした。その後、徐々に森林認証が進み、昨年10月現在で72万7千ヘクタールとなりました。なかでも、紋別市を含む網走支庁管内のSGEC認証材は29万6千ヘクタールで、一地域としては国内最大の認定地域。今後はさらに面積が広がることが期待されます。

石出 北海道に住んでいる私たちにとっては、うれしい追い風。それと、網走支庁管内の林業関係の方たちは、認証材の付加価値をさらに高めてブランド化させようといっているのを聞きました。実際すれば、全国各地からオホーツクの木材が求められるようになるかもしれません。

中尾 環境にも優しい森林認証材は、地域の林業発展にもつながっていくはず。これにオホーツクの木材のように商品力が強化されれば、森林認証材の一定基準をさらに上回る高品質なブランド材として、認知度も人気もグッと上がると思います。

石出 私はこれまで住宅建築を通じて、国産材をいかに普及させようかと試行錯誤してきました。そして国内の間伐材をなんとか建材として製品化し、原木の確保から製材、流通、設計、建築までを協業化した独自の住宅供給システムも構築してきました。北海道ではこれからの、間伐材と道産の森林認証材を使った家づくりを進めていきますが、私どものHOP東日本(横浜)では、中尾さんとも関わりが深い富士山麓の北山社有林を使わせてもらうことになりました。またHOP京都では、京都府産材を使用するなど、木材の地産地消に努めたいと思っています。

地方で生産された木材を国内で消費すれば、木材の輸送エネルギーが削減でき、CO₂が削減できます。それが外国の違法伐採を防ぎ、また、森林の減少を抑えることにもつながるはず。この考えからHOPハウジングオペレーションでは、道産材を使うのとくら、CO₂削減に貢献できたのか

を数字で表す「ウッドマイルズ関連指標算出プログラム」と「道産材使用証明板」をお客様に家を引き渡すときに、お渡ししているんです。

消費者に向けて、積極的な
普及活動をするために

中尾 日本の森で育った木材で家を建てること、家族の健康を守る上でも最良の選択であると思います。また、地球温暖化を防ぐ環境保護の観点からも、持続的な林業活動ができる森の木材で家をつくること、近年ますます共通の認識になってきました。そこでSGECの森林認証制度を、さらに積極的に消費者に向けて普及させていくために、国産認証材利用促進協議会です。協議会の設立は2007年7月で、石出社長のHOPさんも正会員になっていただいています。昨年9月現在48事業体からなる正会員と、SGECの普及を支援して下さる金融機関等5社の協力会員によって構成されています。

石出 中尾さんは国産認証材、とくにヒノキや杉などを使った木造住宅の普及に尽力なさっていて全国を飛び回っておられるんですね。国産認証材について、消費者に訴えたいことはありますか。

中尾 森林認証制度は大きなうねりとなって動き始めました。次はその森の木をどう使うのが、テーマになります。高温多湿の日本の気候風土にも適した国産の杉やヒノキであれば、何より安心です。健康にも良いはず。食品はあれほど産地表示が叫ばれているのに、こと住宅に関しては、無関心のまま。人生で最大の買い物であるはずなのに、多くの材料がどこのものかわからないままに家を買ってしまうのではないですか。

石出 理想は、いつまでも安心して住み継いでいける家。そのためにも、信頼できる国産材を使った家が求められているのだと思います。

中尾 産地表示の重要性は、住宅輸入材の急増とそれに対する国産材の低減、二部ブランドとなっている国産材の偏重という問題にもつながっています。たとえば吉野材であれば、ブランド化してきたために、他のところでは切った木を吉野材に持っていくような表示がまかり通って良いはずがありません。だからこそ、産地が明確になった認証材が必要なのです。認証材を使って家を建てることは、日本の森林を守ることだけでなく地球規模の環境保全の観点からもとても大切なのだという意識を強く持つてほしいですね。

森を愛する気持ちで活動する、
森をたてようネットワーク

石出 まちたく同感です。私は豊かな森に囲まれた日本の生活文化や美しい教えの素晴らしさを多くの人たちに知ってもらおうと考え、2004年にNPO法人「森をたてようネットワーク」を立ち上げました。そこでは、森を守り育てる活動を行っています。このNPO法人が主催となって、京都や札幌で「森の教室」を開催したり、地主の皆さんやHOPの考え方に賛同してくれた皆さんと一緒に植樹祭を行ってきました。その数は全国各地で1万本を超えましたが、これからも続けていくつもりです。

中尾 なるほど、素晴らしい活動ですね。日本の貴重な森林を大切に守り育てたいという思いは同じ。これからも豊かな未来のためにがんばっていきましよう。今日はどうもありがとうございました。